特46
3
9

緒言

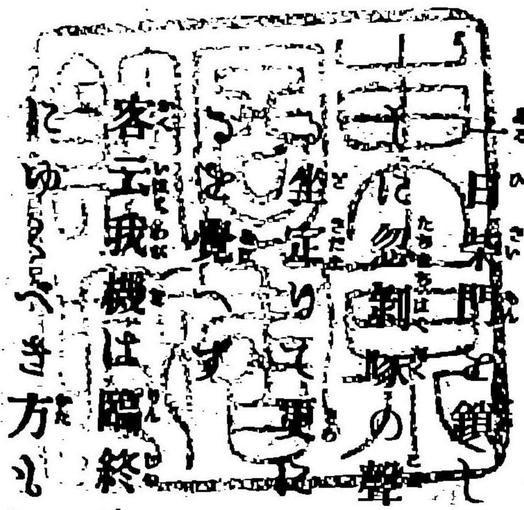
吉水大師の給はくつよく信するかたを勧れば邪見を起させじと誘ふれば信心強からずなるも御なり」を宣哉彼在世には邪見にならんことを恐れ給ひてつよく念佛を勧めたりしかば自力の迷心に拘りて金剛の眞信に昏きもの殆と多かりし然り而して我常祖大師唯信正因の旨を述て吉水大師の奥義を開顯し他力本願の眞印を的示と給ひしより中祖大師を歴て信明院殿に至るまで種々の異義起りしかども却て信因稱報の宗義いよ〳〵精にいよ〳〵密なり然るに或は宗

義を誤て邪見に陥るものありて他の謗難を惹起するに及べり於是乎故信法院殿しば〳〵消息直諭の化儀ありて眞俗二諦の法義を擴張し給ひ特に臨末に迫らせられて懇篤の遺訓を垂れ給ふ吾大法主殿これに奥書し給ひて此消息は祖師相承の宗義眞俗二諦の妙旨なり一流に浴するの輩此遺訓を本として進では政令に遵ひ退ては出要を辨ふべき事肝要なりとの給ふ〻る懇諭を蒙りながら僧侶信徒にしてこれを遵奉するもの甚希なるは實に以て不遺憾哉頃日親友の來り訪ふありて談こゝに及ぶよりて聖教量に據り古德の說に從て私の所見を述ることゝはなりぬ敬て江湖の諸賢に告す解義の通暢すると否とは學者の執見によりて說或は反對に出て通暢の義も不通暢と見做すことあらんなれは敢て爭ふべき非ず況や愚僧の述る所は不通暢の義なるは固より其分なれは請ふこれを怒し給へ雖然若宗意に違害せりと認むる所あるに於てはこれを不問に措くことなく筆硯の勞を厭はずその非を擧てこれを指示し給へ速にこれを改めんと欲す希くは爲法の精神を以て公平無私の評論をなし給はゝ幸甚

明治二十五年八月

三部妙旨談

東陽圓月口述
岩雄建章筆記



日蓮門に鎖して聖教を拜讀して法味を愛樂しつゝあり
に忽剃髪の聲ありこれを迎るに念佛もろともに入來
生定りて更に世事を雜へず共に法話を爲して晷の移
るを覺ず

客土我機は臨終まで地獄だねばかり造りて地獄より外
にゆくべき方もなき淺間敷ものなれども大悲の願力に
よりて往生せしめ給ふことの難有やと喜ふばかりなり

地獄たねとは重きを就てこれをいふ[illegible]
即六道輪回の迷のたねなり

予尋て云地獄だねあらば地獄ゆきと云は尤のことなり
君は地獄だねはいう消るものとをもふやう[illegible]
答云命の娑婆にあらんかぎりは罪はつきざるなりとの
給ふ故に臨終までは地獄だねありて地獄ゆきなりと心
得居るなり

尋て云不可稱不可說不可思議の功德といふことはかず
かぎりもなき大功德のことなりこの大功德を一念に彌
陁をたのみ申す我等衆生に回向しましますゆへに過去
未來現在の三世の業障一時につみきえて正定聚のくら

ゐまた等正覺の位なんどにいたるまでのなりとの給ふ
をはいかゞ心得るや[illegible]

答云一念のところにて罪みなきいてとあるは一念の信
力にて往生きだまるときは罪はさはりとも[illegible]ならずされ
ばなき分なりとの給ふが故に地獄だねありても往生の
さはりとならざるゆへあれどもなきも同じことなりと
れを罪きにてとの給ふものなり

尋て云何故に地獄だねか往生のさはりにならざるや

答云往生は願力不思議を以て得きせ下きるゆへに地獄
だねありながら往生をうるなり[illegible]

尋云地獄だねありながら往生するならば淨土にまいりてもやはり地獄だねは消えずしてこれありとするや

答云彼淨土に往生しぬれば淨土の國德として地獄だねは消滅するなり

尋云然らば臨終滅罪の宗意と心得らるゝや

答云滅罪の時節は一念をも臨終をも機の方に於て穿鑿すべきに非ず故に中宗大師は罪の沙汰無益なりとの給ふ

尋云中宗大師の順誓に對せられて懇諭し給ふものは安心上の所談なりなるほど安心上に在ては滅罪の時節を沙汰するは無益なりとすべしと雖解義上に於てはこれを辨明するを必要とすべきなりこれより解義上に就て論ずべし安心と解義と區別ありと雖相反して乖戻すべきの理なし一文不知の尼入道といへども他力眞實の信心をうるときは不知不識解義に契ふべきことなるべし然れば信心を得たるものゝ罪障消滅するは解義上に於てこれを判ずるに實際いづれに在とするや聖教には一念滅罪の文あり念々滅罪の文あり又臨終滅罪とも見つべき文ありいづれを以て眞宗の正意とするや

答云解義上のことは敢て答ふることを得ず請ふ師これ

を辨ぜられよ

予答云解義と雖安心に疎き文あり安心に親しき文あり

ろの疎きものと雖安心と水火の如く相反すべきに非ず

況やその親しきものに於ては大に安心に關係する所あ

るべし滅罪の如きは最親密なるものなりこれを論ぜざ

るべからす若臨終まで地獄だねありと云はゝ一念のと

きに消滅するにはあらずと云はざるを得ず眞宗の正意

は一念滅罪にあるべきなれば臨終滅罪の義を立つとき

は宗意忽潰れ了るなり

客問云一念罪滅を以て眞宗の正意とするは何を以てこ

れを云ふや答云第十八願成就の文に即得往生住不退轉

と説き給ふ信卷の末に成就の文を釋し給ふて一念は一

心なり一心はすなはち清淨報土の眞因なりとの給ひ次

に現生十種の益を明して住不退轉の義を擴充し給ふろ

の中第二至德具足の益第三轉惡成善の益この二益はこ

れ付屬の一念大利を以て成就の即得往生住不退轉を顯

し以て一念を佛因圓滿の義とすることを示し給ふこれ

すはち行卷に明し給ふ一乘海の機にたゝて信卷に票して

正定聚の機との給ふものなり然るに若臨終滅罪を實義

とするときは一念のとき消滅するに非ずと云はざるを

得ず若一切の罪障を滅し盡さゞるときは轉惡成善の理に違するが故に佛因圓滿と云へからす高祖大師の御意豈それ然らんや聞信一念に万行圓備の名號を全領すると同時に過去未來現在の三世の業障こと〳〵く消滅するなり依之和讃に不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてりとの給ふ中宗大師これを寶章第五帖第六通に委く釋し給ふ披て見給へ又眞要鈔に成就の文を釋し給ひていまいふところの往生とはあなかちに命終のときにあらず無始已來輪轉六道の妄業一念南無阿彌陀佛と皈命する佛智無生の名願力にほろぼされて涅槃畢竟の眞因はじめてきざすところをさすなりすはちこれを即得往生住不退轉とときあらはさるゝなりとの給ふ全く高祖大師の御釋意に同じ又光明名號因緣に佛法不思議のちから凡夫をして報土の往益をとげしめんことこれをうたがふべからず滅罪の德あれば重罪の惡人なれども生死をはなれ生善の益あれば無善の凡夫なれども往生をうるなりこれを他力と云なりとの給ふその意亦同じゝの餘の諸文枚擧するに遑あらず然れば滅罪生善に非れば佛因圓滿に非ず佛因圓滿に非ざれば住正定聚に非ず故に一念滅罪を以て眞宗の正意とするなりと

知るべきなり　　十

問云轉惡成善の益を得る上は信後に惡と名くるものはとれなきの理なり然るに三毒等の諸煩惱を起るとれを惡と稱せずして何と名くるや若惡と名け毒と云ひ罪と稱するときは信後に地獄たねありと云はざるべけんや地獄たねあらは地獄ゆきと云も何の失あらんや

答云信卷曰發起往相一心故無生而當受生無趣而更應到趣已六趣四生因亡果滅故頓斷絶三有生死と此中因亡とは果を引くはたらきを滅するなり果滅とは未來の惡報をまねかざるなり眞要鈔云信心をうるとき攝取の益にあずかる攝取の益にあずかるが故に正定聚に住すしかれば三毒の煩惱はしば〳〵起れどもまことの信心はかれにもさへられず顚倒の妄念はつねにたにざれともさらに未來の惡報をまねかずと未來の惡報をまねかざるが即惡因に非るなり若惡因ならは未來の惡報を招かざるものとは云べからず然れば惡報をまねかざる所の妄念なれは只その相のみありてその用なし月筌大德挿花のたとへを以てこれを示されたり正信偈勝說同く梅の花なれとも庭樹の花は實を結ぶこれを無信のものゝ貪瞋煩惱に喩ぶべし瓶裏の梅花は花の相にかはりはなけれど

更に實を結ばず實を結ばずを雖梅か櫻となるに非ず
己信の人の貪瞋煩惱以てこれに比し知てるべし信後を
いへども凡夫はやはり凡夫なれば果縛の穢躰なるほど
は信を得たる上も貪瞋等猶おこるなり惡と名け罪と名
くといへども惡趣におもむく用きなきゆへに只うの相
のみありて惡趣の因とは云べからず高祖已下の聖教を
熟讀するに罪用を滅すると罪相を滅するとの二義あり
て罪用の滅するは心命のつくる時にして罪相の滅する
は身命のつくる時にあり（身心の二の命終は次下に最要鈔を引くか如し）六趣四生因
亡果滅との給ひ三世の業障一時に罪きえぬとの給ふ如

きは墮獄のはたらきを滅するなりこれは聞信の一念に
あり頓倒の妄念はつねにたゆざれどもとの給ひ命の娑
婆にあらんほどは罪はつきざるなりとの給ふが如きは
うの貪瞋等の機相依然たる舊瀕色を云ふなりこれは果
縛の穢躰つくる時貪瞋等の業相隨て消滅するなり罪用
の滅するは願力に依るといへども罪相の滅するは報の
尽るに隨て滅するものなれは願力に依るに非ず當知信
後はたゞうの相のみありて用なきが故に中宗大師はな
き分なりとの給ふ
問云挿花のたとへはまことに然るべし然るときは信を

はたる身の貪瞋煩悩と無信のものゝ貪瞋煩悩とろの相の一邊につくときは全く同なりや答云その相同しと雖亦異なる所あり聖教所判によりてこれを案ずるに中宗大師の仰に彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身をば丸めたることなりと又信決定の人は誰によらず先みれは尊くなり候これその人の尊きに非ず佛智をいらるゝが故なり」と又信ある人はみるさへ尊さ」と又信の上はきのみわろきことはあるまじく候或ば人のいひ候などゝてあしきことはあるまじく候今度生死の結句をきりて安樂に生ぜんとおもはん人いかんとさだめあしきさまなることをすべきやを仰られ候」と二諦相資の妙味はこゝにあるべし然るに臨終までも地獄ゆきの機ならば尊くなるべき理なし信を得たるもの豈地獄ゆきの機ならんや煩悩具足の身も心も全く南無阿彌陀佛に丸められたるときは刹那刹那の煩悩心中に佛智遍滿する故に苦果を招くはたらきを滅亡するを以て業相はあれどもなき分なり是以地獄だねに非ず地獄たねに非れは地獄ゆきに非ず更に委く辨せば最要鈔云身心のふたつに命終の道理あひわかるべき歟心命終とは無始よりこのかた生死に輪廻したる迷情の自力心本願の道理をさくところ

にて謙敬すれば心命つくるときにあらずやそのとき攝取不捨の益にあづかり住正定聚の位にさだまるこれを即得往生といふべし善惡の生處をさだむるは心命のつくるときなり身命のときに非ずと然れば信をいたるものは一念の刹那より娑婆の命の終るまでは往生極樂の道ゆきなれば稱名念佛相續して時々尅々近づく大果を待ち樂むの外なゝ然りと雖未だ身命終に至らざる間は妻子にまつはれ世路に走り各その身に生れつきたる產業あり農家に生れたるものは耕耘を事とし商家に生れたるものは賣買を事としその他個々の業あり皆ろの身に具はりたる業なりろの業たるや皆貪欲を事とせざるはなしこれ果縛の穢躰なる間は止むを得ざるの事業にして只これを止めざるのみならずこれを勉强せずんはあるべからず若通途善惡因果の理を以てこれを云ふときは農商等皆罪業なれば自力修入の門に依て迷を轉し悟を開かんとせばこれを斷ずるべからずと雖眞俗二諦の宗旨は却てこれを勸勵するなり中宗大師はたとひ商をするとも佛法の御用と心得べきなりとの給ひ吉水大師は身口の二業を意業にゆづり世路のいとなみを往生の資糧とあてがひ妻子眷屬を知識の同行とたのみてよ

はひの日々にがたきをは往生の近づくをよろこび命の夜々に衰るをは穢土のやうやく遠ざかるをとゝろ乃至よろめにはとりわき後世者としられず世の中にまぎれてたゞ彌陀の本願に乘じてひそかに往生するとの給ふ古德傳しかれば信の上は念佛を主とし世間を客人として生涯を送るときは愛妻愛子及農商等の如きは依然たりと雖王法に乖き人道に戻るの所業は自これを爲さゞるに至るなりこれを如教奉行の念佛行者とすかくの如くなるときは殊勝ぶりをするにあらざるも自然に尊くみゆるこれを以て眞宗の行者をするなり

問云信後の躰相殊勝ならざるものは往生を得ずとするやの[illegible]

答云若信後の行狀を以て往生の得不を決するは自力の行者なり若往生の得不に關せずとて行狀不如實なるを自ら攻る心なきは邪見の行者なり既に往生決定の後なれば行狀を以て往生いかゞの心を起すべきの理なし又往生淨土の道中なれば不似合の行狀あるべき理なしちかりといへども或は誤てすまじきことをし云まじきことを云ひ思ふまじきことを思ふことあるとき必慚愧の心を生ずこれを如實の行者とす御一代聞書に信決定の

人をみてあのごとくならでとおもへばやがてなるなり
あのごとくなりてこそとおもひすつるはあましきことと
なりとの給ふ上に引くところの中宗大師の示し給ふ信
決定の人の心得及吉水大師の仰せらるゝところの一種
の往生人の意想を心に係てあのごとくならばやとおふ
ときはおのづから如實の行者となるべし
客大に喜歎して云眞俗二諦の妙旨尊ひ哉殊勝なる哉こ
の旨をよく遵奉する人なればこそ妙好人最勝人の美稱
あるも宜哉然るに眞俗二諦の宗義を委く辨ぜられしは
僧侶の中にも未だこれを聞かず願くば更にその佳境に
入らんもおもふなり就之本宗の僧侶彌陀の願意を述る
に惡ありながら善根もいらず功德もいらず此儘なりに
て御助けなりとすゝむるもの大に二諦相資の教相に戻
るやうにおもふなり此義云何
答云二諦相資の教相に戻るに似たれども實に然らず何
となれば善惡因果の道理に據りて惡の止まざるをおそ
れ善根のなきを憂ふこれ自力の機執なり出離生死を心
に係るものは必この情執なくんばあらず然るにその機
執をのがれは他力信心にならず惡ありながらと云
ひ善根も功德もいらぬと云は自力の機あつかひを捨て

よと云ことなり然れば機の方はたのむばかりにて何の造作もなく何のわづらひもなし彌陀をたのめは南無阿彌陀佛の主になるゆへ滅罪生善の德益ありて生死をはなれ往生をうるなり上に光明名號因緣を引くが如しこれを眞諦門とす然而觸光柔輭の願益他力大行の德用によりて身のふるまひおのづから王法人道に契ふに至るこれを眞諦を以て俗諦を資ると云なりこれすなはち第十八願のこゝろなり委くば爭か曾て著せる眞宗掟義に辨ぜり披て見給へ

問云有人の說に云攝取の益より芸ふときは此機は惡趣へ落ちざるなれとも攝めらるゝ機の方より云ふときはやはり無有出緣の機なり喩へは籠の鳥の如し籠の方より云ふときは飛去ることのなきやうにしたれども籠の中の鳥の方より云ふときはやはり飛去るの鳥にして捨置けは飛去るゆへに籠の中に入れおくなり云云此說の如きは可否いかん

答云他の所立を批評することは敢て好むところにあらずと雖宗意研究の爲にこれを論ずへし然るに或は前來述るところと繁重を免れざるもあるべし請ふこれを恕せよ。攝取せられたるときは正定聚の機となるべし何ゞ

一人の上に於て正定聚の機と無有出縁の機と二機あるべけんや若強て一人上に二機ありと云はゞ法徳と性得の機と相融ぜずして水の中に油の入りたる如きものと云はざるを得ず安心決定鈔云信心決定せん人は身も南無阿彌陀佛心も南無阿彌陀佛なりとおもふべきなり人の身をば地水火風の四大よりあひて成ずされば機法一躰の身も南無阿彌陀佛なり心は煩悩隨煩悩等具足せりこゝろを刹那にちはりてみるとも彌陀の願行の遍ぜぬところなければ機法一躰にして南無阿彌陀佛なり」と中祖大師この意を述て彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身をば丸めたることなりとの給ふ又しつらふと云は衆生のこゝろをろのまゝをきてよきこゝろを御くはへさふらひてよくめされ候」と此等の御詞によるに我等が迷倒の心のそこに彌陀の功徳のみちゝて遍ぜぬところなけよは惡趣の種子となるはたらきはすでに消滅して只うの相あるのみたとへは梅干の如し梅子の中心まで壇のゆきわたらぬところなきが故に芽を生ずるはたらきなしといへども梅子のすがたはそのまゝなり今亦如此無有出縁とは惡趣の因ありて三界を出ることなきを云ふ聞名の一念に惡趣におもむくべきはたらきを滅

たゞ已る而して貪瞋等の煩惱その相依然として舊の如くなるもはたらきをなさゞるが故にこれを罪はさはりともならずされば分なりとの給ふ籠の中の鳥のたとへは全く聖教量に違するの說なり信後に於て飛たつ鳥の如く活物の地獄ゆきの機ありと云はゞこれ臨終滅罪の義にして一念滅罪の祖意に乖戻するの說なり且又地獄ゆきの惡つくりが未信已前と少しもかはるところなくして臨終まで貫くものならば地獄ゆきが惡をつくる當然なりあたりまへの事をするに慚愧はいらぬことなり農夫が糞桶を擔くとも慙づべきわけなし商人が貪濁の心深きも恥づべきわけなし今亦然り地獄ゆきなれば地獄だねを造るはあたりまへにしてあるへきわけなれば十惡等いかなる惡を造りても慚愧の心を生ずるはいらぬことなり如此の義にては二諦相資の域に達することを難矣哉正定聚の機にたゝて日々に極樂が近づくとおもへばこそとりはづしてすまじきことをしいふまじきことを云ひおもふまじきことをおもふとき慚愧の心を生ずへきことなり

問云有師の說をきくにその論する所前來師の述るところと大に異なり而してろの說理あるに似たり願くば師

の評論をきかんとおもふなり有師の説に法德の得益を云はゝ信一念に於て既に三世の業障を滅盡して正定不退等の密益の談あり性得の機相を云はゝ依然舊を改めざる地獄者なりと此義いかん（地獄者とは地獄にゆくへきものと云の畧語なり）評して云一念滅罪を以て實際とするや臨終まで罪の滅せざるを以て實際とするや若一念滅罪を以て實際とせば信後に於て滅すべき罪業あるべからず一念のところに於て罪滅し已れば地獄種子なし地獄種子なきものを地獄者とは云べからず若實際臨終まで罪消にずして地獄者なりと云はゝ一念滅罪の宗意に違す唯信文意に一

念に十八十億劫のつみをはすまじきにはあらねども五逆のつみのおもきほどをしらせんが爲なりもの給ふとの御釋を熟思せよこれ一念滅罪を宗意として念々滅罪の經文は爲にする所ありて説き給ふものなりと示し給ふに非ずや又寶章に和讃を引釋し給ひて不可稱不可説不可思議の功德といふことはかずかぎりもなき大功德のことなりこの大功德を一念に彌陀をたのみまうす我等衆生に回向しましますゆへに過去未來現在の三世の業障一時につみきえて正定聚のくらゐまた等正覺の位なんどにさだまるものなりと給ふこれ大經付屬の一念

大利の義意を述給ふものなり又眞要鈔云いまいふところの往生といふはあながちに命終のときに非ず無始已來輪轉六道の妄業一念南無阿彌陀佛と皈命する佛智無生の名願力にほろぼされて涅槃畢竟の眞因はじめてきざすところをさすなりすなはちこれを卽得往生住不退轉とときあらはさるゝなりとこれ本願成就の一念卽得を佛因圓滿と釋し給ふなり然則祖師已來の釋意一念滅罪に在ると明なり苟もこの宗意に違するときは眞宗の門侶に非ず若法德と性得と二邊共に實際なりといはゞ一人上に於て二の實際あるべきの理なし喩へば一人の身躰にして西ゆき東ゆきと云が如し西へゆきながら東ゆきとは云べからず若會して同時にこれを談するには非ず法德の邊を以て談ずるときは正定聚なり性得の邊を以てこれを云ふ時は地獄者なりと云はゞ正定聚の時は慶喜踊躍するも地獄者の時は踊躍のあるべき理なきを以て怖畏心ありとするか若然らずして慚愧心ありと云はゞ法德と同時の所談に落在す次下に辨ずるが如し又性得と法德とを分離して二の實際ありとするときは性得は終に法德を以て轉ぜらるゝものに非ずして永く法德と相背反するものなりと云はざるを得ず然ると

きは法德の得益は一念に在りと云ハ只往生のさはりとならざるのみにして實の滅罪にあらずと云ふ義に墮するなり若性得も轉ぜらるゝと云はゝ信後にたとひ貪瞋等の起るも地獄種子にあらざれは唯ろの相のみありて地獄者と云べき理由更にあるべからす今謂信後相續は地獄者を願力を以て助け給ふことのうれしやと喜ぶの外あるべからず煩惱にさへられて懈怠するときあるときは喜ぶべきの理なるに懈怠して喜ばさることの淺間しやと慚愧するのみこれ一念滅罪の上の機相なり法德の得益はありても性得の地獄者を轉ぜられざる已上は

歡喜心のなきも性得なればよろこばざるが道理にして惡を造るを當然とす當然の事なれば慚愧の心はいらぬ事なり高祖大師の可㆑耻可㆑傷との給ふは徒らごとを仰られしとするか恐れ多きにあらずや

有師又云受法の機に就て云はゝ正定聚の人と云ふべきも性得の機に就て云はゝ則無有出緣の凡夫と云はざるべからず而して信機信法は是領受の信相なり罪障消滅はこれその信所得の益なりこれを混ずへからず若領受の信相と法德の得益とを混じて信機の機を正定聚の人とせんか自身はこれ現に菩薩なり彼阿彌陀佛の四十八

願は菩薩を攝取し給ふなりを信ずべきとするか已此說いかん

評云受法の機は正定聚にして性得の機は無有出緣なりとは共に許すところなり然るに受法の相と云ふときは攝受衆生と深信するのみ彼信機釋の如きは攝受衆生の衆生の二字を別に開て示し給ひたるものにして信機の相として信法を離れて別にこれあるにあらず唯一の信法中に宛然として存するのみ若然らずと云はゝ一流安心のすがたは南無阿彌陀佛の六字のこゝろなりとの玉ふ無有出緣の機と別見すべからざることを以て知る

でし又論主の二心皈命の如きは信機の缺たる安心とするか有師の二種一具の信相と云は信機の相を信法の外に別に見るに似たり未審今は彌陀をたのむと云内に宛然として信機は具するものとす而して攝受にあづかる已前は地獄者の衆生なるも攝受衆生と信受しにるが即これ二種一具の信心にして正定聚の機なれば無有出緣の機は願力と攝受せられ已るときは別に地獄者の機を認むべからず故に一念受法の信相即是信機信法にて地獄者を助け給ふと信ずるの外なし地獄者が正定聚の機と轉ずるは受法の一念に在て信前信後の別をなす

所以なり貪瞋等の相は依然たる舊顔色なるも信前信後分齊これ異なり混同して論ずべからず信前の貪瞋は惡趣におもむく力用あり信後の貪瞋にはその力用なし故に眞要鈔に顚倒の妄念はつねにたにざれどもさらに未來の惡報をまねかずとの給ふ和讃云超世の悲願きゝしより我等は生死の凡夫かは有漏の穢身はいはねどゝゝろは淨土にすみあそぶと有漏の穢身とは卽凡夫なり心は淨土にすみあそぶとは生死にあらざるなり故に我等は生死の凡夫かはとは凡衆にして凡衆の攝にあらざるを云ふなり有師は信前信後の別を辨ぜずしてこれを混ずる故に信後に於て地獄者を許す信後に地獄ゆきの機ありと云ふもの文に違ふ理に違するの不正義なり前に具述るが如し又有師は領受の信相と信所得の益を混ずべからずとするものゝ意思ひがたし蓋領受の信相は信機信法なれはその機は無有出緣の機にして所得の益は正定聚なれは無有出緣の機を正定聚とするが故にこれを混ずると難ずるゝゝろ歟前に已に辨ずる如く領受の信相は終南大師に依れは二種深信なりと雖願文成就及論主の一心飯命の如きは信機の別相を見ず上に辨ずる如く彌陀をたのむと云く內に具する所の意味を開

て二種とするものにしてその信相は唯一の深信なり此に知る終南の二種深信と論主の一心帰命と具畧の異み然るに有師は信機の別相なきは領受の信相に非ずとするか然らば佛願佛經及一論は領受の全相に非ず又領受の信相は終南大師に至て始てろの全きを得たりと云はざるを得ず然るときは佛願佛經も一論も未究竟の説なりとすべし豈うれ然らんや今謂御助け一定と信ずるが領受の信相なり而て御助け一定と云が即正定聚の義なり領解文に御助け候べとたのむが信相にして往生一定に御助治定が信所得の益なり往生一定御助治定

と存じ云が正定聚に入りたる心相なりと知るべし有師正定聚は密益にして少しも機相に顕はるゝものに非ずとするか歓喜地の如きも初地不退の名にして密益なれども機相にあらはるゝに非ずや行巻に獲二眞實行信者心多歓喜一故是名二歓喜地一と正定聚も准じて知るべしこれ別途不共の義なり高祖大師は必得往生を釋し給ひて不退の位に至ることを得ることを顕すなりと又即得往生を釋し給ひて正定聚のくらゐにつき定るとの給ふ寶章に地獄へもおちずして極樂にまいるべき身なりとの給ふ地獄へもおちずとは不退なり極樂にまいるべき身とは正

定なり然れは往生一定をおもふが即正定聚に入たるすがたなり亦これ地獄ゆきに非るなり理實には因益同時にて攝取不捨の故に信心定り信心定るが故に正定聚に入るなり正定聚に入るが信心の定るなり信心の定るが攝取不捨の益にあづかるなり三卷鈔に本願を信受する前念命終なり即正定聚に入るなり即得往生は後念即生なり即時入必定なり他力の金剛心なりと知るべしと又寶章處々に六字を釋して南無の三字をたのむ機の方とし阿彌陀佛の四字を或は攝取不捨の義とし給ひ或は無明業障のつみとがたちまちに消滅して正定聚のかずに住すとの給ひこれを以て信心決定のすがたと結し給ふ然れは領受の信相と所得の益を混すると難ずるものすなち高祖中祖二大師を難するなり請ふこれを慎めよ上來獲信の一念に於て無有出緣の機の別相を取てこれを論するもの宗意に非ることを辨じ畢る又信後に至て憶念相續して地獄ゆきを御助けとおもふて喜ぶ心相はこれあるべきも單に地獄ゆきとおもふ心相は決してこれあるべからす領受の信相と法德の得益とを混じて强て信機の機を正定聚の人とするとはこれ何たる譫語ろや信機の機を正定聚の人とは誰がかくの如く解する

ものありて此言を吐くや信機の機は無有出縁の機なることは學匠に非るもよくこれを知る自身はこれ現に菩薩なり彼阿彌陀佛菩薩を攝取し給ふと信すべしとは何ぞ人を誣るの甚しき信心をうるを正定聚の機と云ことは高祖大師の明判なり少しく聖教を讀むものはこれを知る無有出縁の機を攝取し給ふと信するが即正定聚の機なり一念受法の時正定聚の機となりぬ當躰即是地獄ゆきの機に非るなり無有出縁の機を正定聚の機とするに非す無有出縁の機を助け給ふ願力を信するを正定聚の機とするのみ有師は攝取せられたる機を地獄者と云ふ攝取せられたる上は能信の機に於て無有出縁の機を別に認むべからす有師却て正定聚の機を強て地獄者とするもの大に宗意を誤解せりと謂つべし

有師又云信機の處即信法にして又信法の處即信機なり而して信機とは自力を捨るなり信法とは他力に皈するなり自力をすてたる處即他力に皈したるにて他力に皈したる處即自力をすてたるなれば玆にその一あればその二なき能はすこれを二種一具の義とは云なりと可否いかん

評云なるほど信機信法は即捨機托法なるべし然れども

ぬの一あればその三なき能はずとは何ぞ思はざるの甚しき有師は自力と他力と二あることを知て捨ると飯するとは只これ遮表の異にして二なきことを知らす喩へば明闇は二なれども明の來ると闇の去ると二ありと云べからざるが如し此義初起に在てこれを云ふは好し有師の辨する如く後々に初起の信機信法の信相に同じき信相ありて信後猶地獄者の機ありと云はゞ畫になりて夜ありと云が如是解し去るときは他力になりてもなを自力ありと云はざるを得すと云失を招くべし下に至て具に辨ぜん

有師又楷定記に依て信後と雖みづから機分を省れば出離の緣なき者にして地獄者なりと云ふ記云猶疲夫の氷陸進み難くして他の風航に乘じて頓に潰渚に至るが如し其身仍舊羸劣の疲夫なりと又後世物語を引て云此身におひて罪消て心よくなるべしといふことはゆめ〳〵あるまじきことなりさあらんに取りては即身成佛にこそあんなれ何條穢土をいとひ淨土に生ぜんといふみちならんやすべてつみ滅すといふは最後の一念にこそ身をすてゝいかの土に往生するをいふなればこそ淨土宗とはなづけられたれ乃至このこゝろをしつればわがこゝろ

のわろきにつけても彌陀の大悲のちかひとろあはれにしてでたくたのもしけれとあふぐべきなり等との給ふ是信後に於て其當分の淺間しさを思ふにつけてはかへるものを助け給ふことのかたじけなさよと喜ぶべきを示し給へる明文なり云云此義いかん評云所辨の如くなれは眞宗の宗意は臨終滅罪の義にして高祖大師の一念滅罪をは有名無實の戯論とするの失を招くべし何となれば有師は他流の説に雷同して彼羸劣の疲夫船に乗するの喩を取て罪の消滅せぎるに合せば實渚に至りし後も猶疲夫なれば彼土に入り已りても

罪業ありて地獄者なりとするか若會して彼國德により て罪を消滅すと云はゝ疲夫も着岸の後は壯健の身となるか呵々縱令一歩を讓て國德によりて罪の滅すると云を許してこれを論ずるも滅罪の實際は國德に在て彼土の益とせすんはあるべからす然らば前に法德の得益を云へば一念に在りと云ひしも此に至て實際一念滅罪に非すして信一念の時には法德もなしと云義となり畢る此乃宛然たる臨終滅罪の義なりとの義を主張するものとは龍谷門下の人鼓を鳴してこれを責て可なり又後世物語を引て云するもの文意を善く了得せざるなり彼文

は此土人聖の聖道門に簡んで此土に於て成佛するに非ることを示し給ふ文なればその意を得て窺がはずんばあるべからず文に此身に於て罪きえて心よく成べしといふことはゆめ〳〵あるまじきなりとの給ひ又すべてつみ滅すと云は最後の一念にこそ身をすてゝかの土に往生するをいふなれとの給ふこの文意を味ふべし有漏の穢躰に具はりたる煩惱を云ふのみ卒爾に文をみれば臨終滅罪の文に似たれども次上の章に易行道のこゝろを述てこれをこゝろうべきやうは今の凡夫みづから煩惱を斷ずることかたければ妄念まことゝめがたししかるを彌陀佛はこれをかゝみてかねてかがる衆生の爲に他力の本願をたてゝ名號の不思議にて衆生のつみをのぞかんと誓給へりさればこそ他力とも名づけたれとの給ふ既に名號の不思議にて罪をのぞくとの給ふ然れば聞名の一念こそ名號を全領する時尅なれば一念滅罪の義なるや理在可見然而今章につみ罪すといふは身を捨てかの土に往生する時との給ふもの即是罪相にゝて罪用を云ふに非ず上に月筌師に依て義意を述るか如し若有師の所云の如くなれば正くこれ臨終滅滅の義となり畢る豈龍谷門下の人ならんや

有師又信後相續の信機は其現身を地獄者と云にはあらずして唯これ初起の信機を再演するまでのことなるべしと云問を設てこれを難じて云若所問の如しと爲さば信後相續の心相は曾て地獄者にてありしを既に御助ありしと追想するに過ぎざるのみ果して然らは信機信法ば曾て一たび過去に於て起りしのみ若その現在に就かは則ち信機も無く信法も無しと云ふに墮す乃至後續の信機果して初起の信機を再演するまでのものならは但これ記憶の分齊のみ何を以てか心々相續念々無遺の信心となすを得んやを可否何如

評云信機信法は初起の信相なるは論なしろの後續を論するに再演に非ずと云はば實際初起の如く念々に信機信法の信相ありて信機の機は實際地獄者の機なりと云ふ義なるや明かなり若然らは二難あり一には前に信機は自力を捨るなり信法は他力に帰するなりと云義なれば心々相續して念々に自力を捨て念々に他力に帰すると云ふ義となるなり然れば今日も自力を捨て明日も自力をすつると云ことになる故今日より云ふときは明日すつる所の自力は未だ捨てずしてこれありと云はざるを得ず如是なるときは臨終に至るまで猶捨つべき自力

ありと云の失を招くなり之には今日も機を信し法を信し明日も明後日も機を信じ法を信ずを云義なれは聞名の初より臨終まで只これ初起の信心にして後續を云時はなきことになり往因究竟の時尅に聞名の一念を定むべからず宗意豈それ然らんや今謂中祖大師信心歡喜をいふは信心さたまりぬれは淨土の往生は疑なくおもふて喜ぶこゝろなりとの給ふ然れは信後相續の相は初起に二種一具の信を得て安堵心に住したる上は念々相續して地獄者を助け給ふことのすれしやと喜ぶのみろの安堵心の躰は所謂信心を云二字をはまことのこゝろとよむとの給ふ是なり此心臨終まで貫徹して思ひにわたるときもわたらざるときも夢寐間も貪嗔煩惱の起るときも不斷常住なるものなりこれを初後不二の信躰といふ安心決定鈔云他力の信心本願にのりぬなば佛躰すなはち長時の行なればさらにたゆむことなく間斷なき行躰なるゆへに名號すなはち無爲常住なりとこゝろなり乃至機の念不念によらず佛の無导智より機法一躰に成する故に名號すなはち無爲無漏なり」とこの意なり而し て時々心相に浮ぶときは初起に得る所を思出し〳〵喜ぶのみとこれを憶念相續といふ憶は應持不忘と解すその

意可知有師は三河譬の西岸に到り着くまで水火のあるが如く臨終まで貪瞋等の起るを地獄種子とする故に信後に地獄者の機ありと解す今は不然信後に起る所の貪瞋等は果縛の穢躰に屬する所の有漏の報心にして穢躰のあらんかぎりは盡きざるなり然れども皈命の一念に迷の種子は滅して惡趣におもむく力用はなくなりて只その相あるのみ未だ穢躰亡失せず屬する所の報心何ぞ滅せんや是以報心より起る貪瞋等の淺間しき機相に就て初起に地獄ゆきを助け給ふ願力を信じたるまゝを思出し思ひ浮べて喜ぶのみ若信を得たるもの罪相までも

なくなりて通途必定の菩薩の如く諸煩惱の起らぬ聖者の相と變ぜは相續すると云こともこれあるべからす今は不然無有出緣とは惡趣におもむくはたらきあるを云ふ聞信の一念にそのはたらきを滅すこれ御助けにあづかりたるなり雖然猶これ有漏の穢躰なれば貪瞋等はその相依然として起るなりその機相のあましきに就て思出〳〵歡喜相續するなり上に已に辨する如く罪用を滅すると罪相を滅するとの二重ありて罪用の滅するは心命の尽る時にして罪相の滅するは身命のつくる時なり併せ思て旨を領せよ

有師又云法德滅罪の説の如きは則ち密益の談なり密益の談は何ぞ政化裨益の説を成ぜんや若うれ獲信の人は必ず現實に改過遷善の効を顯すべく乃信前に於ては呼ぶに惡人罪人を以てせられしもの一旦獲信するとあるや則善人德者を以て稱せらるゝ程の効驗あるべしと云はゞこの教德の政化裨益を談ずるには都合好き所無しと爲さゝるも此説や或は遂に轉惡成善の實効を視て往生の得不を決判するの弊に墮し人をして自力信罪福の心を養成せしむるの僻を生ぜしめんかを恐るゝなりそれ信後の行狀の如きは往生の得不に毫も關係する所

なきなりと此説何如

評云此説最大なる誤なり眞諦を以て俗諦を資ること眞宗の正意なるべきに密益の談は政化裨益の説を成するものに非すと云はゞ眞俗二諦は只相妨げざるのみして相資るの義はなしとする乎故信法院殿の御遺訓に我宗に於ては王法を本とし仁義を先とし神明を敬ひ人倫を守るべきよしかねて定めおかるゝ所なり是則觸光柔輭の願益によりて崇德興仁務修禮讓の身となり候へは天下和順日月清明の金言に相かなひ皇恩の萬一を報じ奉ることはりなるべしとの給ふをは拜讀せざるや觸光柔

輭は密益にしてろの力用政化に裨益となるに非ずや光明の照觸にあぶとき三垢消滅して身意柔輭になると云佛經の明文あり身心の柔輭なるは三垢の消滅による然れは滅罪の密益にろの効驗のみつべきあると明なり何ぞ聖教を窺ふの麁鹵なるや又御一代聞書に末三十三丁信心治定の人は誰によらすまづみれはたふとくなり候とれその人のたふときに非す佛智をにらるゝがゆへなれば彌陀佛智のありがたきほどを存すべきなりとの給ふ佛智全領は密益なりといへどもすがたに顯はるゝに非すや密益なればとて少しも發表せざるものには非るべし

佛智全領が即不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてるなりこの時過去未來現在の三世の業障一時にきえて正定聚の位又等正覺のくらゐなんどに定るもの なり然れはまづみれは尊くなるもの政化に裨益たらずして誰か政化に裨益たるものあらんや然るに信心を得たる後と雖凡夫は凡夫なり農商及工は依然として舊を改めざるすがたにして而もおのづから殊勝にみゆるなり此則聖教量に依る私說臆斷にあらず然るに有師轉惡成善の實効を視て以て往生の得不を判決するの弊に墮して人をして信罪福の心を養成せしむるの癖を生ぜん

ことを恐るゝと云ものの然らず一たび聞信一念に往生一定の大安堵心になりたるもの何ぞ信後の行狀により て更に往生の得不を決せんや信罪福の人となるの恐れは決してとれあるべからず佛智のはたらきにて王法にも違せず品行も正しかるべき道理なればこそ偶誤て王法人道に乖くが如き所作あるとき我機のあさましきによりて道理の如くなりゆかざるを耻る心を生ずるなり若密益は政化稗益に關係なきものなり信後は惡つくりの地獄ゆきの性得はからはらざるを我機の當然とするときはすまじき云まじき思ふまじきとすべき事はなかるべし然れはいがなる惡をなしても何ぞ慚愧することを須んや眞俗二諦の法義豈其然乎然而或は自力に墮するものありて往生の得不に猶豫するものあるはこれ法義を誤解するものなり誤解より來るところの弊はこれを度外に置きて可なり若有師の云如く機相の性得は地獄者なりと教示せば造惡は我機の當然なりとおもひ邪見に墮して慚愧の心なき至るや必せりたとへは數回懲役に落ち習ひ性となりて自ら懲役人と名乘り懲役場を吾宅の如くおもふものは博奕をしても偷盜をしても慚る心なきが如し若機相の性得地獄者なりと教示せば邪見

の人を養成するなり我豐前にもその弊に墮するもの少なからず他國にも必これあるべし此則信を得てもその機は地獄ゆきの惡造りなりと教示するより起るところの弊なり現量既にその弊最多きを見る局外者の我眞宗を誹議するもの亦唯こゝに在り人を善道にみちびものこれを愼まざるべけんや有師の所立の如くならば恐くは眞諦を以て俗諦を資けざるのみならずして相妨るの失を招き遂には信者をして政化を害するに至らしめん可恐々々

客云前來二說を評論せしを聞て信後に地獄ゆきの機ありと云ふもの宗意に非るを了解せり然るに罪相と罪用との二重を分別して聖教の文を引てこれを證すと雖ども明判なきが故に相承の釋意然るや否や未だ知るへからず請ふ更にこれを辨ぜよ

答云凡聖教の中違文ありていつれを以て正意とするや判然ならざるもの只五三のみならず若一々に相承の明判あらは又何の爭かこれあらん雖然ろの相承の指南なきものは文理を推究めてその正意の所在を窺し知るべきのみ然るに二文各ろの義ありて偏すべからざるものあり一文を以て正意とし違文を會すべきものあり宜

たゞく料簡すべし今試みに滅罪の義を案ずるにその理を推究するときは一念滅罪を眞宗の正意とす上に委く述るが如し更に聖淨二門に通じてこれを論ぜは只二力の異あるのみにしてその理に於ては准例すべきなり謂煩惱即菩提生死即涅槃の理を證するを佛果とすその佛果を證するに此土入聖と彼土得證との異あり聖道門の如き八位々に斷惑證理を論じて見思の惑を斷じ尽すときは三界を出るとを得べし然るに維摩居士の如きは深位の菩薩にして妻あり無垢子あり月上愛妻愛子はこれ欲界の煩惱なれども既に三界の生を潤す用を斷じ尽して只その相のみあるものなりと知るべし弘願を機はみづから貪愛等の煩惱を斷ぜざれども名號に智斷の二德を具する故に聞名の一念に一切の罪業を斷尽にして佛智を全領するこれを佛因圓滿とするのこれを證顯するは彼土に至りし時に非ざれは此に於て佛性を見ること能はず一念滅罪は只是名號の德用にして機の造作を用ひず斷德を全してこれを得るか故に不斷而斷といふなり笛阜道人月筌云苟も明信佛智疑惑を除き尽すときは佛智圓斷の德を得るが故に一切の諸惑尽く斷尽すといへども これ密益にしてその顯證は彼土に至て得る所なりこの故

に現生に在ては諸惑を斷ぜずといへども信躰既に佛智なるときは現惑業種を薫ずること能はず猶瓶中に挿みたる花の故種の力に依て且く花開くと雖菓實を結ばざるが如し是以行者の不斷は佛の斷より成する故に不斷にして斷なりうの斷全く佛德なるときは斷にたゝて不斷なり佛に約してこれを語るも亦この義あり佛德を以て斷すといへども衆生は依然として舊顏色なるが故に斷にして不斷なり不斷なりといへども佛德より斷するが故不斷にして斷なりこの不二の理致乃是生佛一躰なり深くこれを思へ已上當知一念聞名のとき佛の斷德に依て

業因の作用を斷するが故にその機相依然として舊の如くなるも更に果を招くの用なしされば生分とは此之謂也彼維摩居士の如きは自力斷なり弘願の信者は他力斷なり自力斷は界内界外の諸惑を次第に斷じて猶根本無明を未だ斷し尽さずして一品の無明ありこれを等覺の位とす他力斷は疑惑無明を除き尽すと同時に佛因圓滿して界内界外の諸惑一毫もこらず願力不思議を以て惡趣の業用を斷盡すといへども猶果縛の穢躰有漏の報心ありて煩惱の業作依然として止まずして未だ佛果に至らずこの一生をすつるとき往生即成佛の妙果を得

べきなりこれを等覺と名く彼は自力斷の故に位々に修證す是は他力斷の故に一時頓斷なり而も密益にして其の顯證は彼土に在り二力異なりと雖彼愛妻愛子と此の貪愛等の起るとその揆一なり彼は道理成佛の法にして是は通途因果の道理に超異するの法なれは大に區別ありといへども彼の道理成佛の法に例同するの義なくんばあらず熟思して旨を領せよ

客悚然として容を改めて云嗚乎眞俗二諦の法義これを解するの難きこと如是乎如教奉行亦復容易ならざるべし或は世教はさもあらばあれとて心に措かずして邪見に陷り或は行狀をるそかなりとて往生に遲慮とて自力に墮すいかゝ心得て可なりや請ふこれを示し給へ

答云これを解する難きことは則ち難しこれを行ふや何の難きことかあらん上に已に辨ずと雖要を取て更にこれを述べん謂邪見に陷るも自力に墮するも皆眞實の信心をにざるが故なり眞實信心とは云何謂中宗大師の給はく彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になる南無阿彌陀佛の主になると云は信心をうることなり」至心は至德の尊號を以てその躰とす故に至德の尊號我等か心中に入り來て至心となるろの領受の謂ひ上郎ちたのむの

外なし金銀或は田宅等の如き有形物の主になふとは異にして往生一定御助治定と安堵したるを主になるといふ若名號の佛因我物とならざるに於ては決して安堵心を得べからず故に安堵心になりたるが南無阿彌陀佛の主になりたるなり又南無阿彌陀佛の主になりたるを彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身をば丸めたることなりとの給ふ身を丸めたるとてその色形を變ずるにあらずやはりもとの凡夫なりと雖眞實信心を獲得したる人は必口にもいだし色にもそのすがたはみゆるなりとの給ひ又おもひうちにあれば色外にあらはるゝとあり

信を得たる躰南無阿彌陀佛なりと心得れば口も心もひとつなりとの給ふしかれば亦おのづからかはるところありこのを信ある人はみるさへ尊たふとの給ひまづみれはとふとくなり候との給ふ然るに尊くならん殊勝にならんとおもふたとて尊くなるべきに非故に法敬房たふとがる人ぞたふとかりけると申されしとき仰にたふとむ躰殊勝ぶりする人はたふとくもなしたゞ有難やとたふとがる人こそたふとけれとの給ふ御一代聞書末四十九丁此中宗大師の御詞により てこれを按するに信を得たる上は御助けのうれしやありがたやと佛恩をおもひ浮べて念佛申すときはおのづ

から殊勝にみゆるなり又末五十三丁たとひ商をするとも佛法の御用と心得べしとの給ふ當流にて佛法と云は南無阿彌陀佛の外なし然れは南無阿彌陀佛の御用にて商法を し農業をするものは念佛しつゝ世を渡るゆへにおのづから信決定の人はさのみわろきことはあるまじく候あるひは人のいひ候などゝてあしきことはあるまじく候との給ふ教旨に達して信決定の人はみるさへたふとしと云妙域に至るべきなり又末四十丁皆人ことによきことをいひもし働もすることあれは眞俗ともにそれをわがよき者にはやなりてなのの心にて御恩といふことをは打忘れてわかよきこゝろ本になるによりて冥加につきて世間佛法ともに惡き心が必〳〵出來するなり一大事なりとの給ひ又末六十五丁万事に付てよきことを思付るは御恩なり惡ことだに思ひ捨たるは御恩なり捨るも取るも何れも〳〵御恩なりとの給ふ此等の御詞を併照して二諦の妙旨を味ひ給へ

明治廿五年十月十日印刷
明治廿五年十月十二日出版

定價金拾五錢

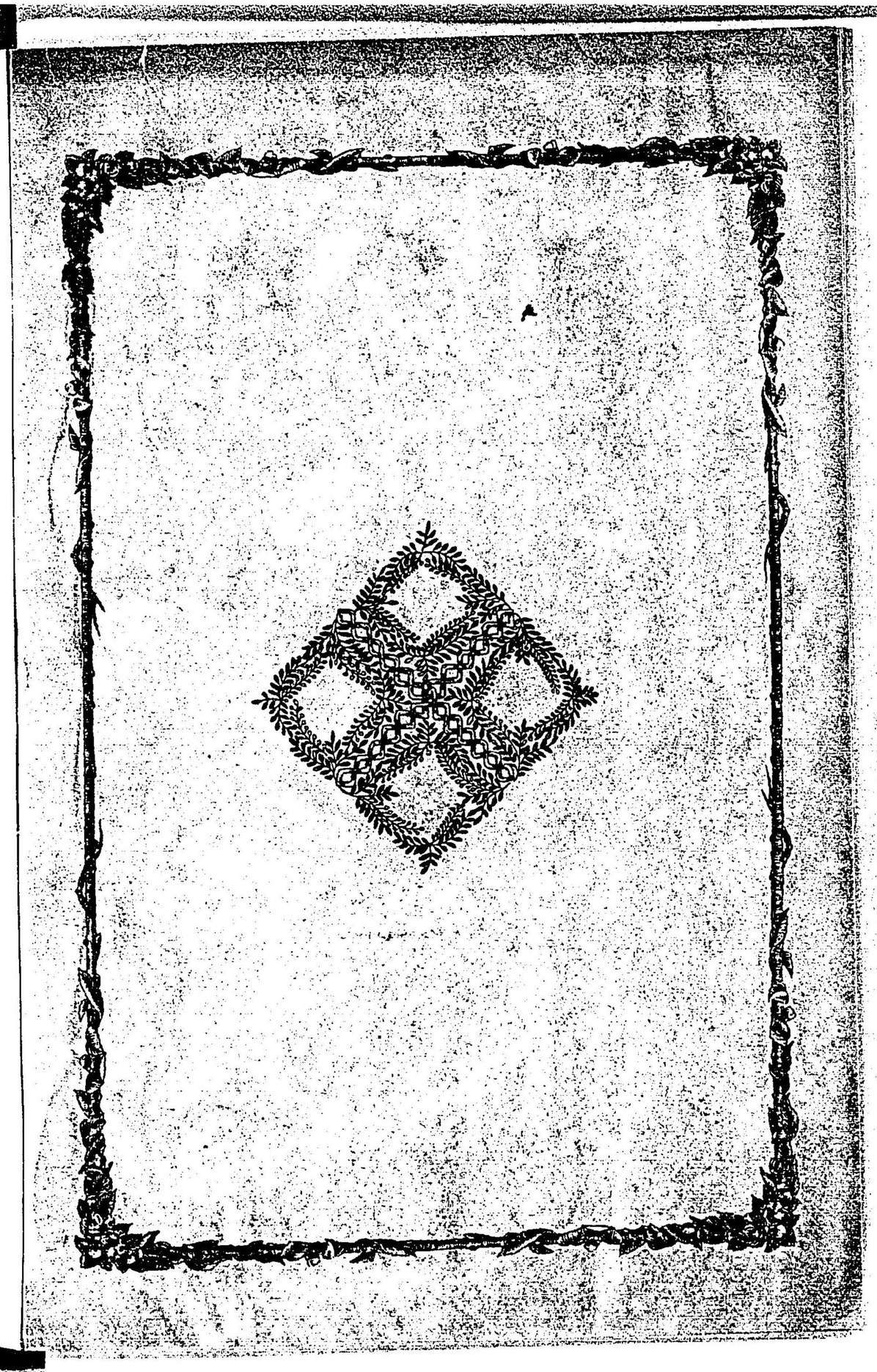
版權登錄

京都市下京區花屋町通西洞院西入山川町四番戸
發行兼印刷者　永田長左衛門

大分縣豐前國宇佐郡封戸村百七十二番地
著作者　東陽圓月

京都市東洞院上珠數屋町上ル富田町十九番戸
印刷所　柳瀨活版所

版權所有



特46
349

二諦妙旨談

国立国会図書館

018946-001-7

特46-349

二諦妙旨談

東陽　円月／述

前

M25, 26

ABF-2432